



## 特集

### 福島原発事故による 帰宅困難区域等の視察研修に参加して

令和7年6月10日(火)～11日(水) 一泊二日

梅雨に入つての二日目の早朝、羽島駅を7時05分発の新幹線で岐阜高山教区第11組の住職7名と、名古屋から乗車した「レスキュー ストックヤード スタッフ」1名の8名で出発。途中乗り換えをしながら、目的駅の大野駅には13時7分に到着いたしました。

この近辺は除染もされており、立派な駅舎に建て替えられていました。構内には線量計が設置されており写真のような数値を示していました。

ここからは津波で自宅を失い、妻と子供、父親を失くしたという木村紀夫さんにレンタカーを使って案内していただきました。



木村さんの自宅のあった場所は、現在中間貯蔵施設に含まれていますが、震災から5年9か月もの間発見されなかったという次女の汐風(ゆうな)さんの遺骨の一部を手掛かりに、さらに搜索を続けながら、「語り部」として活動されているということです。

移動中は山積みになされた残土と、除染作業をする人たちの姿と、放置されたままの廃屋が点在しているだけという、殺風景が続くばかりでした。

14年経った今も、そのままの状態に残されていた教室と汐風ちゃんの席。



線量計  
は0.02  
を指す。



海岸の近くに立っていた  
かつての自宅



今は玄関の赤い敷石だけが残っている。



除染作業をする人  
たち

私たちは、汐風ちゃんが通っていたという小学校へ行つてまいりました。小学校は高台にあることから津波の被害からは逃れられましたが、今は帰宅困難区域にあることから、そのままの状態にしております。汐風さんは震災直後迎えに来られたおじさんと自宅に向かい、津波に飲み込まれたのだといわれました。

私たちは汐風さんの遺骨が発見され、今もお父さんが搜索されているという場所において、お勤めをしてまいりました。

#### 二日目の研修を終えて宿へ

宿は双葉郡大熊町大川原地区にある地域住民の交流や、文化活動、観光復興を目的として2021にオープンした温泉施設「ほつと大熊」に泊まりました。



私たちは、木村さんを囲んで感想や意見を話し合いましたが、地震、津波による復興は、徐々に進み、真新しい公共施設や、住宅も立ち並びんでもものの、原発事故からの復興については、汚染された残土の処理、汚染された水処理問題が山積している現実のあることの底知れぬ不安からの解放には程遠いものを感じました。

そして、何よりも故郷に帰りたくても帰れないといった心の問題には計り知れない悲しみがあることを知りました。



## 二日目 伝承館から宝鏡寺へ

「未曾有の複合災害を経験し、復興への途を歩んできた福島県の記録と記憶を防災減災の教訓として未来へ繋いでゆく」を目的として建設された「伝承館」。

様々な展示物や長期化する原子災害の影響など細やかにわかりやすく多くの資料によって、説明されていた。

その後、予定表には書かれていなかったのですが、双葉郡楢葉町にある宝鏡寺という浄土宗のお寺を訪ねることになりました。

この寺の住職は半世紀にわたり反原発運動を続け、83でなくなった第三十世の早川篤雄さん。東京電力を相手に「福島原発避難者訴訟」では原告団長を務め勝訴し、東電に社長名で公式謝罪する場をつくらせました。



境内には、賠償金など私費で建てた「伝言館」が建てられ、半世紀にわたる闘争の資料の他、ロシマ・ナガサキ・ビキニなどの資料が多数保存展示されており、庭には広島からの非核の灯が静かに灯っていました。



## 伝言板の掲示。 「申し入れ文」の一部分。

**チリ地震級の引き潮、高潮時に耐えられない**  
**東電福島原発の抜本的対策を求める申し入れ**  
 二〇〇五年五月一〇日  
 原発の安全性を求める福島県連絡会 代表 早川篤雄  
 地震や津波に対する原発の安全審査については、かねてから問題提起をしてきましたが、社団法人日本土木学会が二〇〇二年二月にまとめた原子力発電所の津波評価技術に照ら合せても、福島原発の場合、現状のままではチリ津波級によって発生が想定される引き潮、高潮に対応できないことがこれまでの私たちと東電のやりとりで明らかになりました。チリ津波は一九六〇年のことで、このことは、本来、東電は承知のはずであり、福島第一、第二原発の建設・運転に当たって、当然、対策が措置されているべきものです。ところが、福島原発の各原発は、これらの欠陥を放置したままに、建設・運転されていたことになり、きわめて重大な事態と言わねばなりません。

被災者の悲痛な声が聞こえてくるようです。

ふるさととは  
 小分けにされて  
 真一黒な袋の中で  
 燃やされるのを  
 待つ  
 由起子

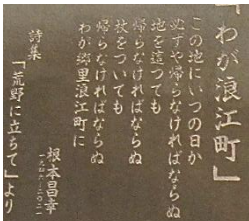
帰る人、  
 帰れない人、  
 抱きか  
 わが浪江町は  
 ある  
 由起子

今回の視察研修で感じられた思いが、ここで凝縮された言葉となつて表されているようでした。

「わが浪江町」  
 この地にいつの日か  
 必ずや帰らなければならぬ  
 地を這つても

帰らなければならぬ  
 杖をついても  
 帰らなければならぬ  
 我が郷里浪江町に  
 根本昌幸

この詩は東京電力福島第一原発事故により、故郷浪江町を離れ、令和3年74歳で亡くなった詩人、根本昌幸さんの詩である。あれから14年経った今奥さんによって自宅前に石碑が建てられたのだという。一時帰宅した奥さんは「ようやく帰れたね」と、夫へ思いをはせられていたという。



今月号は、福島原発事故の記事の特集になりました。

まだ掲載しきれないことも多々ありますが、紙面の関係でできませんでした。機会があればまたお伝えしたいと思っています。

6月の学習会では、歎異抄学習にかわつて、この原発事故の話となりました。

**7月の学習会**は歎異抄を学びます。

7月19日(土)  
 14時より

**お手サロ**  
 7月17日(木)  
 1時半より

光受寺にて